



キヴォトス少女の調教記録

奴隷No.016 才羽モモイ

奴隷No.017 才羽ミドリ

学園外を連れ立って歩いているところを捕縛 拉致に成功
捕縛時の損害:Bクラス構成員12名
(損害人員の治療費に関わる請求金額は別紙参照)

オーダー:鑑賞品として2人同時連縛調教



見覚えのない白い天井の部屋で、モモイは目を覚ました。頭は霞みがかったかのように妙にぼんやりとしていて、思い出そうとしてみても、なぜ自分がここにいいのか思い出すことができなかった。どうやら2人共捕まってしまったらしい。ミドリは隣りにいるが、意識があるのかはわからない。異様なのは2人共ほとんど裸同然とっていい格好で身動きできないほど嚴重に拘束されてしまっていることだ。

辺りを見回すために首を動かそうとすると、
途端に鋭く引つ張られるような痛みが乳首を襲った。

「痛っ……！」

「んんうっ……！」

モモイが悲鳴をあげるとほぼ同時に、

隣で縛られてるミドリがぐもった悲鳴をあげた。

どうやら乳首から吊られたワイヤーが首輪に接続されていて、

首を動かそうとしたり体をよじろうとすると乳首が引つ張られる仕掛けらしい。

しかも、「丁寧」に首輪と足を拘束する棒が鎖で繋がっていて、

それが隣で縛られているミドリとも繋がれているために

どちらが片方が少しでも体を動かせば痛みが連動するようになっている。

なんて悪趣味な仕掛け。そう思った瞬間、近くで何者かの足音がきこえた。



足跡の主はゆっくりとこちらに向かってくる。

やがてワイヤーのせいで首を大きく動かせないモモイの視界の中にも、仮面をつけた白衣の女と、数人の男たちが近づいてくるのが見て取れるようになった。

「「きげんよう。お目覚めかしら。」

さっそくで悪いのだけれど、貴女達には今から試験を受けていただきます」

「誰!?! なんのためにこんなことをするの!?!」

「質問は受け付けておりません。しかし、一点だけお答えしましょう。」

あなたたちはとあるお方のオーダーによりこれから「美術品」として加工されます」

「しかし、あなた達の依頼主はとても寛大なお方です。」

依頼主は、『あなたたちが真に清らかな乙女であるのであれば、

「このようなオーダーは遂行されるべきではない」とおっしゃっています」

「故に、あなた達が清らかな乙女であるのかどうかを今から試験で明らかにします。」

これから行うテストで1時間以内に絶頂しなければ、

あなた達は清らかな乙女であると認められるでしょう」



女が手を上げて合図をすると、
その後ろにいた男たちが無造作にモモイに取り付けられた電気マッサージ機と
ローターのスイッチをオンにしていく。
機械的な振動が、少女の敏感な突起を乱暴に捕まえて震わせはじめた。

「……ひゃんーっ。」

それは本来なら乱暴すぎて快楽を引出すには程遠いような刺激のはずだった。
だが、モモイは自分の下半身に明らかにじんわりと
甘い快感が走りはじめたを感じて狼狽えた。
それもそのはずである。

実のところ、少女には目覚める前から多量の薬が投与されていた。
未開通の処女ですら快楽に悶え苦しむような、そんな強烈な薬を、である。
しかも、1つではなく3つも4つもカクテルにするかのように、
何本もの注射器によって血管に無理やり投与されてしまっていた。

だから、どんなに乱暴な刺激であろうと快楽が走って当然なのだ。
そもそも最初から「テスト」に「合格」させて「調教を辞める」つもりなど
彼らには無いのだから。



「やっ……あっ……なんで……ッ！こんな……っ」

強烈な振動が無理矢理に少女のうぶな身体の奥底に眠る快楽を引き出していく。しかし、未知の快楽から逃れようと身をよじりたくとも、身体を動かせばワイヤーで乳首を引っ張られてしまう。

モモイはその肢体に襲いくる快楽を、

しかし身体を反らせることもできずに受け入れるしかない。

だが救いもあった。

左足の腿に括り付けられた電気マッサージ器は、

モモイの秘部につくか付かないかぐらいのぎりぎりの位置で縛り付けられており、

わずかに足を外側……つまりミトリのいる側に開くことで、

直接敏感な箇所に触れることを避けることができていた。

モモイはわずかでも刺激から逃れられるのならと、

男たちに秘部がみられることすら厭わず足を開き、快楽に耐えようとしていた。

とはいえ、クリトリスに直接接触する形でテープで貼り付けられたローターの、その微細な、しかし今のモモイには強烈すぎる刺激だけはどうしようもない。



「んっ……いっ……いっ……やめっ……」

こんなのを1時間も耐えられるはずがない。

なんとかしてやめさせようと口を開こうとしたモモイの言葉は、しかしその途中で口の中に無機質ななにかが入り込んできたことで中断された。

「んっ……ん……」

いつの間にか後ろに回り込んできた男に

ポールギヤグを噛まされたと気づいたときにはもう遅かった。

必死で舌でポールを押し出そうとしてもうまくいかない。

そうこうしているうちに頭の後ろでカチャカチャと金属の音がして、それ以降は何をしてもびくともしなくなってしまった。



「おっと失礼……3時間経ってしまいましたね」

しばらくぶりに部屋に入ってきた女たちは、
2時間も遅れてきたというのに悪気もないような素振りです。そう言い放った。
しかしモモイはとうとうその言葉も聞こえてはいない様子で、
時折ビクンビクンと身体を震わえては、悲鳴に近い喘ぎ声をあげている。

「んっ……んん……ううっ……んん……」

「んんっ……んねえんん……んんん……」

何度目の絶頂だろうか。

モモイはもはやワイヤーが揺れるのも構わず身体をびくびくとはねさせ、
そのたびに2人の首輪に振動が伝わって乳首が引き絞られる。

ミドリも流石に意識がはつきりとしてきたのだろう。

ワイヤーで乳首が引かれるたびにわずかに身悶えながら
くぐもった声の悲鳴をあげていた。





「この様子だとモモイさんはテスト不合格のようですね……」

とはいえ、おひとりだけテストしてミドリさんも一緒に不合格では可哀想ですからね」

白衣の女はまるで可哀想だとは思っていないような口調でミドリに語りかける。

「おはよう」ぞいますミドリさん。

状況はなんとなく理解していらっしやると思いますが、もう一度説明致しますね」

女が合図をするとミドリの目隠しが外される。

その瞳には明らかな恐怖と怯えがみてとれた。

拘束されて裸体を隠すこともできないという明らかに異様な状況……

それに加えて隣で姉が絶頂状態で放置されているのだから、怯えるのも当然の話だろう。

そして女は再度あの説明をした。

「つまり、1時間絶頂しないでいらられるのであればテストには合格。貴女は晴れて自由の身、というわけです」

「んんん！ んんううー！」

理不尽すぎる説明にミドリが抗議の声をあげたくとも、ポールギヤグで塞がれた口からは意味をなさなくぐもった音しかでてこない。

「ご理解いただけたようでなによりです。貴女のご健闘をお祈りしておりますよ」

では、と説明を終えた女が合図をすると、

周囲にいた男たちがまたしても無造作かつ乱暴に、

ミドリの身体に取り付けられた機械のスイッチをオンにしていく。





「おやおや、残念ながらミドリさんも不合格のようですね」

不合格、という言葉に反応してビクツとミドリの身体が震える。

もう既にこれだけ酷いことをされているのに、

このうえ不合格になったら一体なにをされるというのか。

「んんん……………んんん……………」

「んんん……………んんん……………」

お願い、助けて。

お願い、許して。

2人共、既に心はぼろぼろに崩れてしまっていた。

今この瞬間ですら、

取り付けられた装置は何度も何度も絶頂し続けて過敏になった少女の大事な場所を、徹底的に、無感情かつ無慈悲に責め続けている。

もはやこの度重なる絶頂が薬によってもたらされているものなのか、それとも

この数時間で開発されてしまった肉体によりもたらされているものなのかすらわからない。

いまの2人にわかるのは、このまま続ければ、

あるいはこれ以上の責めを課されれば間違いなく壊れてしまう……………ただそれだけだった。



イキナリや。

みんなが笑ってる
チームにみんなが
思ってるだけどもうかな







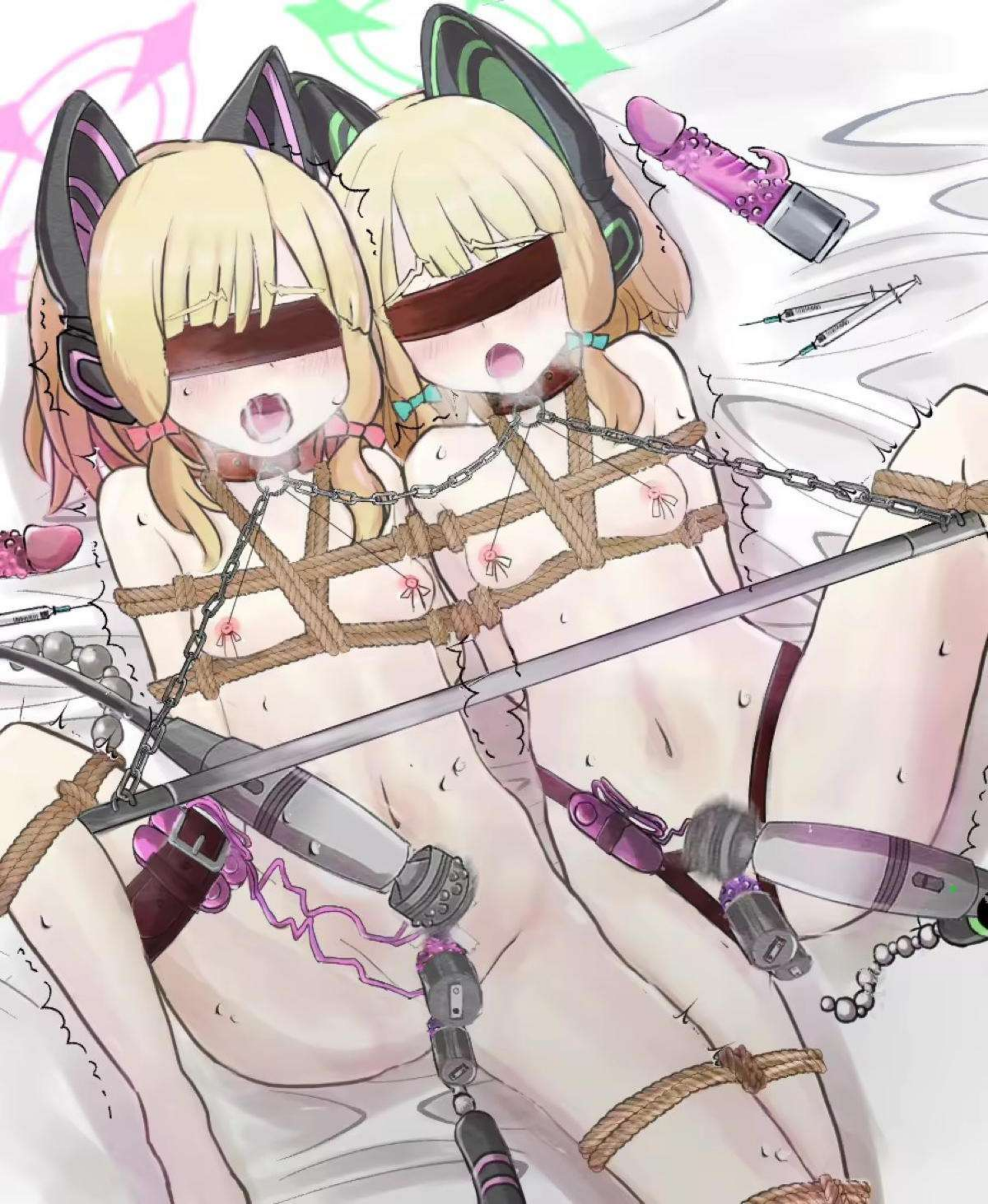








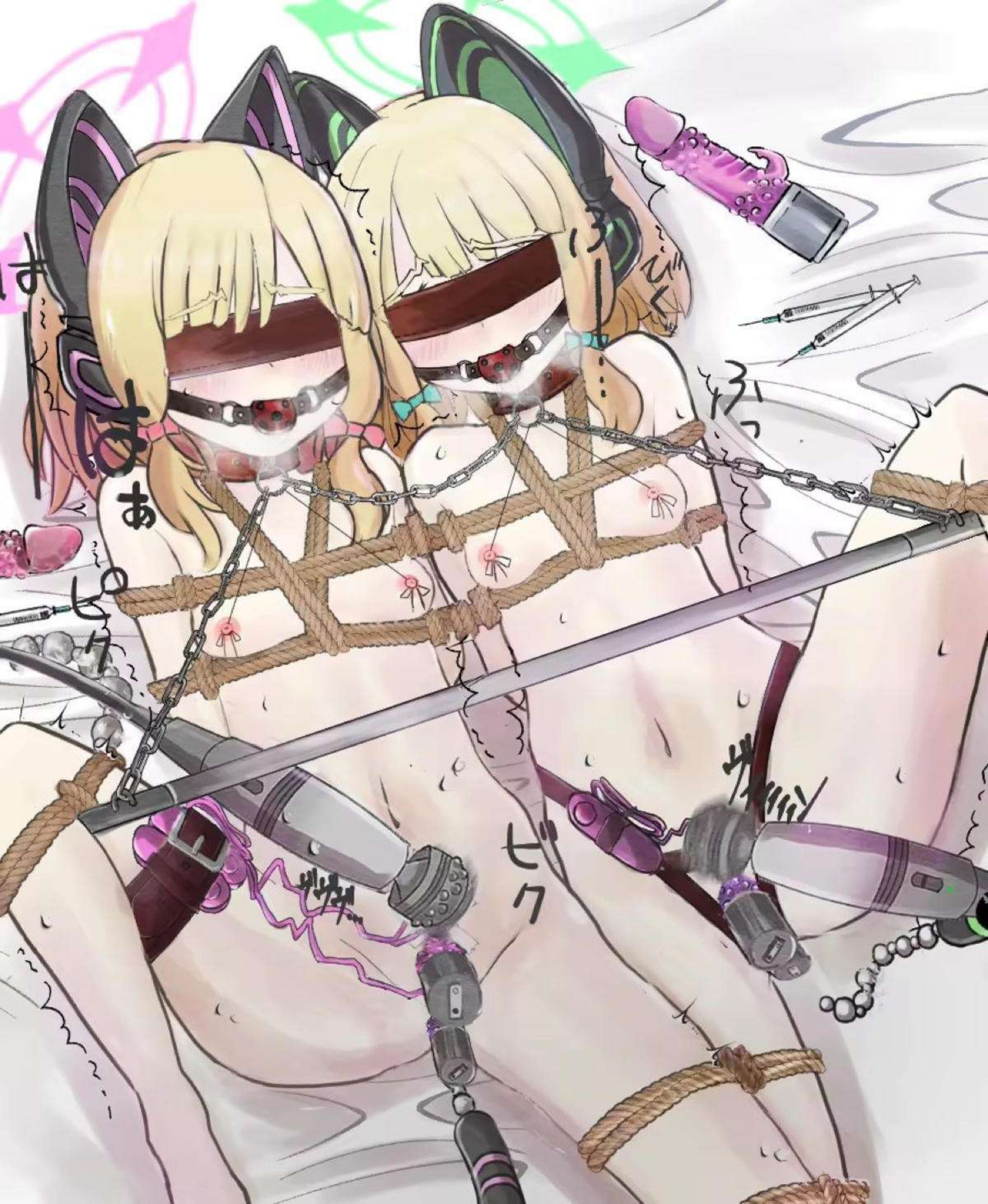














あ

お

の

ク

ク

の

の

の

の

の

の

の

の

の



